神の建造のための祭司職の回復

（金曜日――午前の第一の部）

メッセージ　1

神の建造のための祭司職と王職

聖書：ゼカリヤ 6:11-15．創 1:26．Ⅰペテロ 2:5，9．ヘブル 4:16．啓 22:1

Ⅰ．ゼカリヤ書における安らぎ、慰め、励ましのビジョンは、大祭司ヨシュアが冠を受けたことによって確証されています。大祭司ヨシュア（祭司職を持つキリストを予表する）は、ユダの総督ゼルバベル（ダビデの若枝としての、王職を持つキリストを予表する）に結び付けられています――ゼカリヤ 6:11-15：

Ａ．キリストはエホバの若枝であり、それは彼の神性を指しています。「エホバの若枝」が意味するのは、キリストが肉体と成ることを通して、エホバ・神の新しい発展であり、それは三一の神がご自身を彼の神性において枝出しし、人性の中へと入るということです。これは宇宙におけるエホバ・神の拡増と開展のためです――イザヤ 4:2. 7:14. マタイ 1:22-23。

Ｂ．キリストはまたダビデの若枝でもあり（ゼルバベルによって予表される）、それは彼の人性と王の忠信さを指しています――ゼカリヤ 3:8．エレミヤ 23:5。

Ｃ．キリストは、ゼカリヤ第 6 章 11 節から 13 節で二人の人、ヨシュアとゼルバベルによって予表され、神の宮としての召会を建造するために、神の行政の中で祭司職と王職の二つの職務を保持する唯一の方です（参照、Ⅰコリント 3:12，17．Ⅱコリント 6:16）。

Ｄ．「これら二つの間に平和の合意がある」（ゼカリヤ 6:13 後半）。「これら二つの間」は、祭司職と王職の間を意味します（参照、1:1．エズラ 5:1）。

Ⅱ．ヘブル人への手紙の中心は天のキリストです。天のキリストの主要な点は、彼がメルキゼデクによって予表される大祭司と王（義の王と平和の王）の両方であることです――ヘブル 5:10．7:1-3，28．8:1-2：

Ａ．キリストは力と権威を持つ王であるだけでなく、メルキゼデクの位による大祭司でもあります――2:17．4:14．5:6，10．6:20．8:1．9:11．詩 110:1-4：

１．昇天におけるキリストの天の務めは、彼の王職と祭司職を含み、エホバの宮、すなわち神の宮としての召会を建造するためです――ヘブル 7:1-2．ゼカリヤ 6:13，15．Ⅰコリント 3:16-17。

２．キリストは王として、王の杖（つえ）を持って地を支配し、わたしたちの諸事

を処理しています。彼はまた大祭司として、神の御前でわたしたちのためにとりなし、わたしたちの案件を顧みています――ヘブル 4:14-16．7:25-26．9:24．使徒 5:31．ローマ 8:34．啓 1:12-13。

B．キリストはメルキゼデクの位による王なる大祭司として、神をわたしたちの供給としてわたしたちの中へと供給し、神の永遠の定められた御旨を完成します――ヘブル 7:1-2．8:1-2．創 14:18-20：

1．キリストは地上の務めにおいて、アロンの位による大祭司であり、それは罪を取り除くためでした――ヘブル 9:14，26。

2．そして、キリストは天の務めにおいて、メルキゼデクの位による大祭司と定められました（5:6，10）。それは罪のための犠牲をささげるためではなく、肉体と成ること、人の生活、十字架、復活を経過した神（パンとぶどう酒で予表される――マタイ 26:26-28）をわたしたちに供給して、わたしたちの命の供給となり、わたしたちを養い、元気づけ、支え、慰め、増強して、わたしたちが極みまで救われるためです（ヘブル 7:25）。

C．キリストの王なる祭司職は、神の敵と戦って、義と平安をもたらし、彼が手順を経た三一の神をわたしたちの中へと供給し、わたしたちの日ごとの供給また享受とするためのものです――1-2 節．創 14:18-20。

D．キリストの神聖な祭司職は、彼の命の中でわたしたちを極みまで救い、栄光化へともたらし、すべての死の副産物、例えばむなしさ、うめき、ため息、衰退、束縛、腐敗、奴隷状態から離れさせるためのものです。彼の神聖な祭司職は死を除き去り、命をもたらします――ヘブル 7:25，28．ローマ 5:10．8:19，21，23，30。

Ⅲ．祭司職と王職は神のかたちと統治権のためのものです。祭司職は人に神のかたちを持たせ、王職は人に神の統治権を持たせて、神の当初の意図を完成させます：

A．人を創造することに二つの主要な面があります。それはかたちと統治権です（創 1:26）。かたちは神の表現のためであり、統治権は神を代行して彼の敵を対処するためです。

B．祭司職は神の表現のためです。祭司は主を享受し、彼の表現、現れ、住居、住まい（彼の聖なる祭司の体系としての霊の家）となります――Ⅰペテロ 2:5：

1．「かたち」の路線は祭司職の路線です。なぜなら、人が神に近づき、神に彼を通して流れていただいてはじめて、神は彼のかたちの中で表

現されることができるからです。

２．祭司職は、神と接触して神とミングリングされ、キリストのかたちへと造り変えられ、同形化されて、彼を表現するためです――Ⅱコリント 3:18．ローマ 8:28-29。

Ｃ．王職は、主の権威、彼の統治権のためです。王は神を代行し、神の権威を持って神の敵を対処します――マタイ 28:19-20．ローマ 16:20：

１．「統治権」の路線は王職の路線です。なぜなら、王は神から権威を受け、神のために統治するからです。

２．王職は、あふれるばかりの恵みと恵みの内なる統治によって、サタン、罪、死を、命の中で王として支配し、神の王国のために、神の統治権をもって神を代行するためです――5:17，21。

Ｄ．キリストの血を通して完成された贖いは、「わたしたちを王国とし、彼の神また父の祭司と」しました――啓 1:5 後半 -6 前半。

Ｅ．千年期において、勝利者は祭司であり、神とキリストに近づき、また王であって、キリストと共に諸国民を王として支配します――2:26-27．20:4，6。

Ｆ．失敗した信者たちはこの（千年期の）褒賞を失います。しかしながら、これらの失敗した者たちは千年期において対処された後、新天新地においてこの褒賞の祝福にあずかります。すなわち、新エルサレムとして祭司職において神に仕え、王職において神を代行します――22:3，5：

１．新エルサレムが現されるとき、聖なる都は碧玉（へきぎょく）のようです（21:11，18 前半）。碧玉は神のかたちを指しています。なぜなら、神の現れは碧玉のようであるからです（4:3）。聖なる都の中で命の水（命の霊）が流れて、都を神で満たします。ですから、神のかたち、神の表現が完全に実現します。

２．さらに、新エルサレムの一部分である者たちは、王として支配し、神の権威を行使して永遠に至ります――22:5。

Ⅳ．啓示録第 22 章 1 節の御座と命の水の川は、王であり祭司であるキリストについて語っています：

Ａ．新エルサレムの絵によれば、御座の権威と命の交わり、すなわち命の流れは（1 節）、新エルサレムの建造のためです。これはゼカリヤ第 6 章 12 節から 13 節と符合します。それは、祭司職と王職の職務が、主イエスの予表であるヨシュアとゼルバベルにおいて合流していることについて語ります。この合流は神の宮を建造するためです：

１．命の水の川、命の流れは、神で浸透され飽和されている神聖な交わりであり、彼のかたち、すなわち彼の表現を持つ彼の聖なる祭司の体系のためです――Ｉペテロ 2:5。

２．神と小羊の御座は、神の具体化としてのキリストの支配と頭首権であり、それは彼の統治権、すなわち彼の王国を持つ彼の王なる祭司の体系のためです――9 節。

Ｂ．祭司は神に近づき、至聖所へと入って神の御座に触れ、生ける水の川としての神に彼らを通して、他の人の中へと流れていただきます（ヨハネ 7:37-39 前半）。命の水の流れは、御座からわたしたちの中へと流れ、わたしたちから流れ出ており、神の召会を建造する唯一の道です。

Ｃ．ヘブル人への手紙で、キリストは祭司として、信者たちを至聖所の中へと、すなわち、神との交わりの中へともたらします（2:17．3:1．4:14．5:6．7:1）。マタイによる福音書で、キリストは王として、インマヌエル、わたしたちと共にいます神であり、神を人と結合させ、神の権威を人にもたらします（1:1，23．2:6）：

１．ヘブル人への手紙は都の建造について語りますが（11:9-10，16．12:22）、マタイによる福音書は召会の建造について語ります（16:18）。召会の建造と都の建造は同じ事柄です。

２．キリストは祭司また王であり、いずれも神の建造のためです。キリストの中に、祭司の体系の交わりと王職の権威があり、いずれも神の建造のためです。一方で、キリストは神のかたちのために、命の交わりをわたしたちに流し出します。もう一方で、彼は神の統治権のために、わたしたちを御座の権威の下にもたらします。

Ｄ．Ｉペテロ第 2 章 9 節は、贖われた者たちが「王なる祭司の体系」であることを啓示します。「王なる」という言葉は、わたしたちが王の身分と権威（御座）を持っていることを意味します。「祭司の体系」という言葉は、わたしたちが命の交わり（命の水の川）を持っていることを示します。

Ｅ．わたしたちの間のあらゆる人は、王なる祭司（9 節）、御座からの命の流れを持つ者であるべきです。わたしたちすべての者の中に、祭司職と王職の表現があるべきです。神の民に対する神の意図は、彼らを祭司の王国とすることです（出 19:4，6．啓 5:10）。

Ｖ．ヘブル第 4 章 16 節によれば、祭司として務めをする道は、ただ恵みの御座に進み出て、あわれみを受け、また時機を得た助けとなる恵みを見いだ

すことです：

Ａ．わたしたちはヘブル第 4 章 16 節を啓示録第 22 章 1 節と比較すべきです。この節は、命の水の川が神の御座から流れ出ていると言っています。

Ｂ．わたしたちは霊の中で祈り、神の御座に触れることによって進み出て神を見つめ、神と接触するとき、その霊がわたしたちの中を流れ、わたしたちを通して流れ、わたしたちを供給することを経験します。

Ｃ．この供給、この命の霊の流れは、時機を得た助けであり、神のあわれみと恵みです。あわれみと恵みは、神がわたしたちを通して流れ、わたしたちによって得られることを指しています。

Ｄ．時機を得た助けとは、生ける神、流れる神がわたしたちの中へと入って来て、わたしたちを通して流れ、わたしたちを元気づけ、潤し、供給することです。主の血によって（ヘブル 10:19-20)、わたしたちが進み出て恵みの御座に触れるときはいつも、神は流れてわたしたちを元気づけ潤し、環境がいかに劣悪であっても、わたしたちは形容し難い喜びを経験します（Ｉペテロ 1:8)。

Ｅ．この御座は信者たちにとって恵みの御座ですが、神の敵にとっては権威の御座です。恵みの御座は祭司職と関係があり、権威の御座は王職と関係があります：

１．神の御座から命の水の川が恵みのために流れ（啓 22:1)、火の川が裁きのために流れます（ダニエル 7:9-10)。

２．命の水の川の流れは、水の都としての新エルサレムを生み出しますが、神の裁きの火の川は、火の池へと流れ込みます。

３．わたしたちは恵みの御座に触れ、命の水にわたしたちを通して流れさせるとき、あわれみと時機を得た助けとなる恵みを受けます。その時わたしたちは神の権威の御座に触れることができ、神はわたしたちの内側の不正常な状態を裁くことができます。

Ｆ．神は、わたしたちが至聖所、すなわちわたしたちの霊の中へと入って、恵みの御座に触れ、わたしたちを通して命の水を流れさせることを願っています。この流れはわたしたちを神との交わりの中へともたらし、わたしたちが彼の命の中で建造されて、彼の住まい、彼の霊の家、彼の聖なるまた王なる祭司の体系とならせます――Ｉペテロ 2:5, 9。

務めからの抜粋：

聖なる都の内容――御座と生ける水

啓示録第 21 章と第 22 章は、聖なる都、新エルサレムの内容の明確な絵を提示しています。神と小羊の御座は都の中心にあります。それは都の頂上です。命の水の川が御座から流れて出て、都全体を流れています(1 節)。都には一つの大通りがあり、川が大通りの中央にあります。命の川のこちら側にも向こう側にも命の木があります(2 節)。第 21 章と第 22 章は多くの事について語っていますが、主要な内容は神と小羊の御座と、御座から流れ出ている命の水の川です。他のすべての項目は、この二つの項目を補足します。例えば、命の木と大通りは川の流れに従っています。神が光であり小羊がともし火である事柄でさえ、命の川の流れと関係があります(3 節. ヨハネ 1:4)。命の水の川が流れることなしに、光の輝きはありません。また、神と小羊が宮である事柄は、御座と関係があります(啓 21:22)。神と小羊が宮であることは、神と小羊の臨在を指しており、神と小羊の臨在は、神と小羊の御座から分離することはできません。神と小羊の御座がなければ、神と小羊の臨在はありません。ですから、新エルサレムの主要な内容は、神と小羊の御座と、御座から流れ出ている命の水の川です。

御座と流れる水は、権威と交わりを表徴する

御座と流れる命の水は権威と交わりを表徴します。神と小羊の御座は権威を表徴しますが、命の水の流れは命の交わりを表徴します。神は神であり、彼は小羊です(ヨハネ 1:36)。彼はまた命です(11:25)。新エルサレムはキリストについて語っており、彼は神の小羊として来て、彼の死を通して贖いを完成し、彼の神聖な命を解き放ちました。この絵は小羊で始まり、命で終わります。それは、キリストが神の小羊として来て、命としてのご自身を流し出すためであることについて語ります(10:10)。この絵は実に深遠です。それは単に書かれた型において提示されたしるしを通して、聖書における明確な啓示を提示しています。全聖書は、神がわたしたちによって受け入れられ、ご自身をキリストの中でわたしたちとミングリングすることを見せています。この受け入れることとミングリングが可能になるために、神は命としてのご自身を、小羊としてのキリストの死を通して解き放ちました(啓 5:6)。彼の死を通して、わたしたちは命としての彼を受け入れることができます。ですから、キリストは小羊でありまた命

です。

ヨハネによる福音書と啓示録で、使徒ヨハネは絶えず、キリストが小羊であり命である事柄を提示しています。ヨハネによる福音書は、世の人の罪を取り除く神の小羊としてのキリストについて語ることによって始まります(1:29)。ヨハネによる福音書はまた、主が来て、わたしたちが命を得ることに関する主の言葉を記録しています(10:10)。この約束は第７章の主の語りかけによって確証されます。その時、彼は立って叫んで言われました、「だれでも渇く者は、わたしに来て飲むがよい。わたしの中へと信じる者は、聖書が言っているように、その人の最も内なる所から、生ける水の川々が流れ出る」(37-38 節)。ヨハネはまた主の死の唯一の記録を提示して、彼が十字架につけられたとき、血と水が彼の脇(わき)から出て来たことを啓示しています(19:34)。血は贖いのためであり、水は命の分け与えを表徴します。新エルサレムのしるしは、小羊としてのキリストにある神が、命として流れ出て人の中へと入ることを見せています。ヨハネは繰り返し、命の水と小羊との間の関係について語っています(啓 7:17．21:6．22:1)。このすべての節は、小羊としてのキリストがほふられて、神聖な命を解き放ち、人の中へと流れることができることについて語っています。これが交わりの面です。

御座と生ける水との組み合わせ

啓示録の絵によれば、命の水の川は御座から流れ出ます。これは、順に、命の流れ、命の交わりを表徴し、御座の権威を伝達します。川が流れる所にはどこにも、御座の権威があります。権威と交わり、すなわち新エルサレムの二つの主要な構成要素が組み合わされています。御座の権威は流れ、命の交わりを通して都のあらゆる部分に流れます。都全体は交わりの中にあり、権威の下にあります。

一方で、御座の権威は都の中心にあり、もう一方で、命の水の川の交わりは都全体を通して流れます。この絵が見せているのは、命の水の川の流れが、都全体を通して御座の権威をもたらすということです。新エルサレムには権威だけでなく、交わりもあります。交わりは権威と組み合わされ、権威は交わりとブレンディングされます。

新エルサレムにあるあらゆるものは、交わりと権威の組み合わせにかかっています。渇く者が飲むことができる水は、交わりと権威の組み合わせと関係があります。都の中の食物、すなわち、命の木からの実は、交わ

りと権威の組み合わせと関係があります。都の中の大通りでさえ、交わりと権威の組み合わせと関係があります。わたしたちの生活、道、神の臨在に対する経験に関するあらゆるものは、交わりと権威の組み合わせにかかっています。この都の中の交わりと権威の組み合わせがなければ、食物はなく、飲み物はなく、大通りはありません。

今日、召会の中で、わたしたちの霊の食物、霊の飲み物、霊の道、神の臨在に対するわたしたちの経験は、交わりと権威の組み合わせにかかっています。地方召会の中で交わりと権威の完全な組み合わせがあるなら、召会は生ける水、食物、神の道に満ちるでしょう。飲むための飲み物、食べるための食物、歩くための小道があるだけでなく、神の臨在もあるでしょう。交わりと権威のそのような組み合わせがないなら、神の住まいのための宮は欠けており、彼の臨在は明らかでないでしょう。神が光であり、キリストがともし火であって神の栄光を輝かし出すことの面はまた、交わりと権威の組み合わせと関係があります。この組み合わせがないなら、光としての神とともし火としてのキリストを知ることはできないでしょう。新エルサレムにおけるあらゆることは、御座と命の水の川にかかっています。御座と命の水の川がある所ではどこにも、何の欠けることもありません。

御座と生ける水は金、真珠、宝石を生み出す

都は純金であり、門は真珠であり、城壁の土台と城壁そのものは宝石です(21:18-21)。都はこの三つの材料で建造されています。なぜなら、都には権威を伴う命の流れがあるからです。命の水の川の流れは金、真珠、宝石を生み出します。これは創世記第2章10節から12節ではっきりと見られます。それは、川が金、ブドラク(木の樹液から生み出される真珠のような材料)、縞(しま)めのう(すなわち宝石)を生み出すことについて語っています。ですから、生ける水の流れがないなら、金、真珠、宝石はありません。

8節と9節は、神が人を命の木のある園に置かれたことについて語っています。10節から14節は、川がエデンから流れ出て四つの分流となることについて語っており、16節と17節は、戻って命の木について語っています。10節から14節は、水の流れに関する挿入された言葉です。この絵の暗示は、人が命の木から命を受けるとき、命は彼の内側から流れて、金、真珠、宝石という結果になるということです。ですから、召会は金、

真珠、宝石で満ちるために、命の水の川の流れ、すなわち、命の交わりを持たなければなりません。もし地方召会に神の霊と神の命の流れがないなら、そのような召会が多くの金、真珠、宝石を生み出すことは困難でしょう。この三つの尊い材料はただ、命の流れから出て来ることができます。わたしたちは神の建造に注意を払いたいなら、命の流れに注意を払わなければなりません。

今日、神の小羊がキリスト教における宣べ伝えの中で大いに強調されています。わたしたちは至る所で人々が、「見よ、神の小羊！」と言うのを聞くことができます。しかしながら、小羊が神の命を解き放って、わたしたちが彼の命を受け入れ、召会として建造されることができると、人々が語るのをほとんど聞きません。召会における彼の命の流れに関してほとんど語ることがなく、命の流れが御座の権威と命の交わりをあらゆる肢体にもたらし、召会が権威と命の交わりに満ちることについて語るのは、なおさら少ないのです。召会は権威を伴って来る命の交わりを持ち、金、真珠、宝石が建造のために生み出されることができるようにしなければなりません。これは、キリストが神の小羊であることの究極の目標です。

御座と生ける水は、
主が王職と祭司職との職務を保持していることについて語る

啓示録第 22 章は、どのようにして旧約時代の贖われたイスラエル人と新約時代の聖徒たちが一つの都、新エルサレムへと建造されるかを描写している絵です。聖書は、神と小羊の御座が神の民の間の中心であることで結んでいます。この御座はまた全聖書の中心でもあります。

神と小羊の御座から流れる命の水の川は、死に渡され、復活の中でその霊として解き放たれて、贖われた者たちの中へと命として流れる神の小羊としてのキリストです。キリストは贖われた者たちの道、実際、命です。それは、彼が新エルサレムの道、実際、命であるようにです。このすべての項目は神と小羊の御座から流れ、その御座は新エルサレムの中心です。神の民の道、実際、命として、キリストは神の権威、御座の権威を神の民にもたらします。御座と命の水は、キリストが王と祭司の両方であることについて語ります。彼は来て道、実際、命となりました。それは、贖われた者たちが神と交わりを持ち、互いにブレンディングすることができるためです。命の水は、祭司としてのキリストの面を指しています。彼はまた御座の権威を贖われた者たちにもたらします。御座は王としてのキリスト

の面を指しています。命の交わりと御座の権威は、祭司職と王職の職務と関係があり、そのいずれも主に属します。

新エルサレムの絵によれば、御座の権威と命の交わりは、新エルサレムの建造のためです。これはゼカリヤ書第 6 章 12 節から 13 節と符合します。それは、祭司職と王職の職務が、主イエスの予表であるヨシュアに合流していることについて語り、それは神の宮の建造のためです。

新約で、ヘブル人への手紙は特に祭司としてのキリストの面を取り扱っています。この書は、キリストが祭司として、わたしたちの道、実際、命としての神を享受することができるようにすることを見せています。彼は信者たちを至聖所の中へと、すなわち、神との交わりの中へともたらします(2:17．3:1．4:14．5:6．7:1)。新約で、マタイによる福音書は特に王としてのキリストの面を取り扱っています。この書は、キリストがインマヌエルであり、神を人に結合させ、神の権威を人にもたらすことを見せています(1:1、23．2:6)。ヘブル人への手紙は祭司としてのキリストについて語り、マタイによる福音書は王としてのキリストについて語りますが、いずれの書も建造の事柄について語ります。ヘブル人への手紙は都の建造について語りますが(11:9-10、16．12:22)、マタイによる福音書は召会の建造について語ります(16:18)。召会の建造と都の建造は同じ事柄です。

キリストは神の建造のための祭司であり、キリストは神の建造のための王です。これらは二つの分離した事柄ではありません。ヘブル人への手紙は、祭司としての主イエスに関して詳細な方法で語っていますが、主イエスがサレムの王であるメルキゼデクの位による祭司であることについて語っています(6:20—7:1)。ですから、祭司としての主は王でもあります。同じように、マタイによる福音書は、キリストが王であることを見せていますが、彼が祭司であることを示すものもあります。例えば、彼は来て彼の民イスラエルを牧養し、彼らに仕えました(2:6．20:28)。これらの事例は、彼が祭司であることについて語っています。キリストには祭司職の交わりと王職の権威の両方があり、いずれも神の建造のためです。

神の小羊は旧約で予表においてイスラエル人と共にあり、成就において新約の召会と共にありました。贖う小羊と共に、命の水が人の中へと流れることがあります。キリストは神の命を流し出すとき、贖われた者たちを神の御座の下にもたらします。一方で、彼は命の交わりをわたしたちに流し出します。もう一方で、彼はわたしたちを御座の権威の下にもたらしま

す。彼は祭司と王の両方です。啓示録第 21 章と第 22 章は、そのような記述的な絵を提示しています。

原則的に、幕屋がシナイ山で設立されたとき、この記述的な絵における要素が提示されました。幕屋は神の民の中心としてのキリストについて語っています。過越の小羊として、彼が殺されて、イスラエル人は神の建造の中で神と交わることができました。さらに、彼は神の権威を人にもたらしました。幕屋の建造の結果として、神の民は神の命の交わりと神の御座の権威を持ちました。彼らは、神であるすべて、神が持っておられるすべてを享受して、神の住まいとして共に建造されることができました。ですから、イスラエル人が幕屋を建造したとき、それは新エルサレムの縮図でした。イスラエル人がカナンの地に建造したエルサレムの都も、新エルサレムの縮図でした。エゼキエル書第 47 章で、預言者エゼキエルは、エルサレムで川が神の御座から流れ出て、この川が行く所はどこでも、あらゆるものが生きて繁栄するのを見ました(9 、12 節)。新エルサレムが新天新地に現されるとき、神の定められた御旨は成就されます。幕屋の絵と新エルサレムの絵におけるすべての要素は、キリストが神の民にとって命であり、彼らを御座の権威の下にもたらして、神の住まいとして共に建造されるようにすることを指し示しています。

贖われた者は王職と祭司職との職務を持つ

聖書によれば、王職と祭司職の職務を持つキリストに加えて、贖われた者も同じように職務を持ちます。ペテロの第一の手紙第 2 章 9 節は、贖われた者が「王なる祭司の体系」であることを啓示しています。「王なる」という言葉は、わたしたちが王の身分と権威を持っていることを意味します。「祭司の体系」という言葉は、わたしたちが命の交わりを持っていることを示します。啓示録第 5 章 10 節は、神がわたしたちを祭司として、地上で王として支配させることについて語っています。わたしたちはキリストに結合され、王職と祭司職の職務を持っています。こうして、わたしたちは建造のための神の必要に応じることができます。

霊を解放するために開かれる

今やわたしたちは、祭司職が王職と均衡がとれていること、すなわち、交わりが権威と均衡がとれていることを見てきて、わたしたち自身を開き、わたしたちの霊を解放して、命の霊がわたしたちの間で自由に流れる

ことができるようにしなければなりません。わたしたち自身を開いてわたしたちの霊を解放する最上の道は、祈ることです。いったんわたしたちが自分自身を開いて祈るなら、わたしたちの霊は解放されて他の人を供給します。すべての聖徒たちが自分自身を開いて祈り、集会で彼らの霊を解放するなら、わたしたちは命の生ける水が湧き上がって集会の中を流れることを経験し、集会全体は新エルサレムの表現となるでしょう。

ある人たちはわたしたちの祈りの題目に関心があるかもしれませんが、わたしたちはこれについて関心を持つべきではありません。わたしたちの祈りの題目は、いつでもわたしたちの状況にしたがっていることができます。例えば、わたしたちは今、わたしたちの霊を開き解放して交わる事柄に関心があるので、主に、わたしたちの霊を開き、わたしたちの霊を解放して、わたしたちの霊を共にブレンディングしていただくように求めることができます。特定の題目を持つことが、祈りの最も重要な面ではありません。最も重要な面は、純粋にわたしたちの霊を開き、わたしたちの霊を活用して祈ることです。わたしたちは口を用いることに加えて、霊を用いる必要があります。わたしたちは霊を解放しなければなりません。わたしたちの霊が解放されるなら、一見して重要でない題目がとても善い題目になります。例えば、共に来て祈る多くの兄弟たちは、特定の題目を持っていなくても、彼らが共に来ることが十分な題目です。彼らは霊を開いて祈ることができます、「主よ、わたしたちを共に集めてくださったことであなたに感謝し、あなたを賛美します。わたしたちを導いてくださり、わたしたちがこの集会であなたと接触するようにとあなたに求めます。主よ、わたしたちがあなたに開いて、わたしたちのだれも霊の中で閉じることがなく、あなたが自由にわたしたちの間で活動するようにしてください」。このような祈りで完全に十分です。

わたしたちの霊が開いているなら、わたしたちの祈りの題目に対して制限はありません。神を礼拝することが題目になることができ、神に感謝し神を賛美することが題目になることができ、建造が題目になることができ、最大の題目にさえなることできます。わたしたちは共に来るとき、建造のために祈ることができます。わたしたちは主に言うことができます、「わたしたちは建造されたいです。わたしたちは建造された召会を好みます。わたしたちは進んで建造の一部分となります。わたしたちを照らし、わたしたちの中で建造にふさわしくないものを見せてください。わたしたちは進んであなたにそれを取り除いていただきます。わたしたちは

進んで、あなたの御手からの砕きと対処を受け入れます」。これらはすべて可能な題目です。ですから、わたしたちの祈りの題目は重要ではありません。重要なのは、わたしたちが霊を開くかどうかです。わたしたちは聖徒たちと共に集まるときはいつも、常に自分自身を開かなければなりません。

わたしたちは自分自身を開くことについて語るとき、これは他の人に遠慮なく話し、彼らの間違いを指摘さえすることを意味すると考えるかもしれません。これは開くことの意味ではありません。開くことは、わたしたちの霊が出て来ることを意味します。わたしたちは来て共に集まるときはいつも、開いて神の霊にわたしたちの中へと流れていただき、わたしたちを通して流れていただかなければなりません。兄弟姉妹が集会で開いて、聖霊に自由に彼らの中へと流れていただき、自由に彼らを経過していただくなら、わたしたちの集会は供給に満ちるでしょう。

過去、わたしたちの問題は、わたしたちの霊が開いていないことでした。わたしたちが集会に来たとき、わたしたちの霊は閉じていました。これはメッセージにかかわる集会においてだけでなく、わたしたちの祈りの集会やパンさきの集会においてさえそうでした。わたしたちの好みは、独立して他の人を観察し、彼らからいくらかの祝福を受けることでした。わたしたちは決して、あらゆる集会が、自分自身を神に開き、自分自身を神の子供たちに開く機会であるという考えを持ちませんでした。ですから、集会でわたしたちの霊は閉じ、命の流れは断ち切られて、流れ出る道がありませんでした。その結果、集会で霊の食物と生ける水に欠け、人々は養われず潤されませんでした。さらに、前進することができない感覚さえありました。なぜなら、神の臨在がわたしたちと共になかったからです。

召会の集会におけるそのような不正常な状態は、命の水に流れ出る道がないという事実と関係があります。わたしたちの集会は、血行不良があるゆえにあらゆる種類の病がある人のようであってはなりません。わたしたちは、召会の中で命の交わりの循環のための道をきれいにすることに集中する必要があります。命の水の川が召会を通して流れているなら、命のパンと命の生ける水があるでしょう。神の臨在と神の道もあるでしょう。さらに、この流れは金、真珠、宝石を生み出し、最終的に神の建造において究極的に完成します。（祭司職と神の建造、第３章）